

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

すべての子どもは生まれながらにして有能な学び手です。「教師が教えなければ子どもは学ばないし、学ぶことができない」という誤った思い込みを払拭することが、今まさに求められているのです。

上智大学教授
(文部科学省教育課程部会委員)

奈須 正裕



「令和の日本型学校教育」が目指すもの

中教審答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指しては、従来の「日本型学校教育」について「経済発展を支えるために、『みんなと同じことができる』『言われたことを言われたとおりにできる』上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、『正解(知識)の暗記』の比重が大きくなり、『自ら課題を見つけ、それを解決する力』を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないか」(答申、p8)としています。

また、コロナ禍に伴う「学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、『何

をして良いか分からず』学びを止めてしまうという実態が見られたことから、これまでの学校教育では、自立した学習者を十分育てられていなかったのではないかという指摘もある」(答申、p13)とも述べています。

このような状況を改善すべく、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るのが「令和の日本型学校教育」における重要な課題です。では、それは一校のカリキュラムの中で、たとえばどのような姿として実現可能なのでしょうか。今回は、山形県天童市立天童中部小学校の取り組みを例に考えていきたいと思います。

従来の「日本型学校教育」の課題

みんなと同じように

答えの暗記がメインの学習

他者と協働し、
自ら考え抜く学びの不足

言われたことを
言われたとおりに

指示されるのを待ってから
その指示に従って進める学習

自立して学習する力の不足



子どもたちが進める授業

天童中部小学校では通常の授業に加え、教科学習に関しては「自学・自習」と「マイプラン学習」という、子どもが自立的に学ぶ2種類の学習に取り組んできました。

資料1は、6年生算数科における、分数のかけ算の単元での「自学・自習」の様子です。黒板の前に教師の姿はありません。右側でタブレットを手に立っている女の子が今日の先生役で、左側では二人の子どもが仲間の意見を板書にまとめています。そう、「自学・自習」とは、子どもたちが進める授業なのです。

興味深いのは、通常の授業よりもよく手が挙がり、活発な議論がなされることでしょう（資料2）。教師の発問には意図があり、高学年ともなると、それを子どもはどうしても気にしてしまいます。子ども同士だとそんな先生に対する忖度や遠慮がないので、本音でぶつかり合い白熱した話し合いになりやすいこともわかってきました。

「なぜこんなことができるのか」「何か特別な訓練をしているのではないか」とよく聞かれますが、子どもたちは入学以来、先生による授業を膨大な時間経験し、先生がしていることを毎日よく見えています。そ

れを上手に真似っこしているのです。機会さえ作ってあげれば、子どもたちは大喜びで「自学・自習」という名の先生ごっこに真剣に取り組むでしょう。

とりわけ、先生役の子どもは真剣そのもので、事前の準備もしっかりやってきます。仲間たちも精一杯協力してよい授業にしようとするから、活気のある濃密な時間になるのは当然のことなのです。

本来、授業を含め学校生活はすべて、子どもと教師が協働で創り出していくものなのでしょう。学校行事や児童会活動については、これまでも子どもが主体となり、創意工夫を発揮することが多かったのですが、こと授業となるとすべてを教師が仕切ってきました。「自学・自習」はこの壁を打ち破り、授業もまた、子どもたちと教師と一緒に創っていくものとしたのです。

単元まるごとを自分の計画で学ぶ

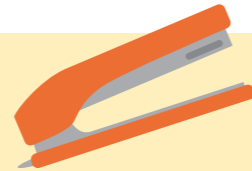
「マイプラン学習」も子どもが自立的に学ぶ学習ですが、「自学・自習」が協働的な学びであったのに対し、こちらは個別最適な学びになります。一般に「単元内自由進度学習」と呼ばれる学習方法で、子どもたちは単元のため、時間数、学習の流れ、利用可能な学習材や学習機会を記した「学習のてび



資料1
6年生算数科の「自学・自習」。
黒板の前には先生役の子どもが立つ



資料2
本音でぶつかりあい、
ともに学び深めていく子どもたち



き」と呼ばれるカードを参考に、各自が自分に最適だと考える学習計画を立案し、自らの判断と責任で自由に学び進めていきます。理科の実験なども、準備から片づけまですべて個別で実施します。学習の進行は各自に委ねられるので、ある一時間を見ると、同じ学級の子どもが異なるカードや活動に取り組んでいたりしますが、単元終了時に全員がねらいを達成すればよいのです。

資料3、資料4は、6年生社会科の歴史学習の様子です。縄文時代から古墳時代へと至る各時代の様子とその移り変わりについて、自ら問いを立て、その解決を目指してさまざまな資料を駆使した学習に取り組んでいます。教科書と資料集を丁寧に見比べ

ながら自分なりの理解を構築しようと頑張る子、タブレットを使っていきなり膨大な資料に分け入る子、一人で黙々と学ぶ子もいれば、友達と相談しながら学ぶ子もいます。学ぶ場所も、教室の自席が落ち着くという子もいれば、広いテーブルが使える理科室に移動する子もいました。

学習環境整備という教育の方法

「マイプラン学習」は学ぶ内容こそ決まっていますが、いつ何をどんな風を使って学ぶかは各自の計画やその時々を考え次第です。この学び方を下支えるのが、教師による学習環境整備です。たとえば、学習期間中、土器や埴輪、石器などのレプリカを博



資料3
教室で友達と
相談しながら学ぶ



資料4
自分の学びやすいように、
広いテーブルに移動して学ぶ

資料5 魅力的な学習環境整備



自分の計画で学び進める
「マイプラン学習」



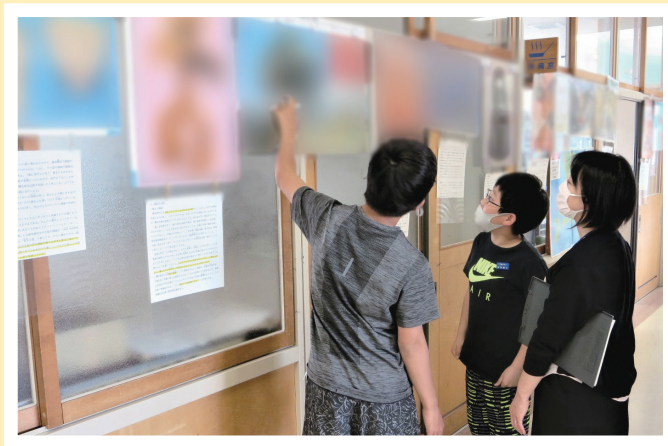
物館に見立てた余裕教室に設置し、いつでも自由に見たり触ったりできるようにしてみます（資料5）。すると、子どもたちは社会科の時間はもとより、休み時間にもやってきては、友達とおしゃべりしながら結構長い時間、それらと関わっていました。レポートで使うのでしょうか、タブレットで写真を撮っていく子もいます。

注目すべきは、すべての子どもが資料5のような関わりをするわけではなく、何度もコーナーを訪れる子もいれば、ほんのわずかな時間しか滞在しない子もいることでしょう。この学習材が心に留まり、そこで得た実感や気づきを中心に学びを深める子もいれば、また別な学習材で学ぶ子もいます。大切なのは、一人ひとりが自分の琴線に触れる学習材と出会うことで、それが何であるかは子どもによって

実にさまざまです。だからこそ、教師としては可能な限りの多様な情報や物品を準備し、提供する必要があると思います。

子どもの都合でいつでも使える学習環境整備としては、教師用のデジタル教科書が入ったパソコンを大型ディスプレイに接続し、子どもに開放するといった工夫も考えられます。ここでも、盛られたコンテンツを隅から隅まで熱心に見る子もいれば、まったく見向きもしない子もいますが、それで構いません。

資料6は、どこの学校にもある教科書会社提供の大型の図版です。一斉指導では教師の都合とタイミングで一回きりしか見せないことが多いと思いますが、こうやって廊下に常時張り出しておけば、見たい子どもが見たいタイミングで見たいだけ見ていきます。



資料6 子どもの意思で資料にアクセス

子どもの探究心の
きっかけになるよう、
可能な限りの
情報や物品を準備

ディスプレイに
画面投影して
みよう

実物や
レプリカを
手配してみよう



参考文献 奈須正裕 (2021年)『個別最適な学びと協働的な学び』、東洋館出版社

まとめ

子どもが学び進めるといって、最後までたどり着かない子が出るのではないかと心配する人がいますが、いちばん遅い子でも時間内にほぼすべての課題を終えます。国立教育研究所の調査によると、単元内自由進度学習での子どもの実学習時間は、総学習時間の91%に達していました。驚異的な数字で、この学習の学習効率の高さを示しています。

加えて大切なのは、すべての子どもは生まれながらにして有能な学び手であり、適切な環境と出会いさえすれば、自ら進んで学ぼうとするし、学ぶ力を持っているという事実への注目でしょう。「教師が教えなければ子どもは学ばないし、学ぶことができない」という誤った思い込みを払拭することが、今まさに求められているのです。

